

目的 アイヌの衣服は、和服の仕事着に似て、袖はもじり袖の筒袖、丈はつい丈で裾はつかない。布を拵たなかつたアイヌの衣服は、模様のないアツシの衣服が主であった。

布の使用は江戸初期からで、日本や中国大陸からの交易に依って得たものと、松前藩支配下において、自らの労働に対しての報酬の小布をためて、シンメトリックな衣服を構成する伝統を作りあげた。衣服の紋様は、各地の地域性を表わすものである。今回は、沙流郡平取町ニ風谷と浦河地方について比較し考察をたごった。

方法 残存資料の調査及び古文書の文献資料の調査に依るものである。

結果 対象の平取町ニ風谷は、富川から沙流川をさかのぼる位置にあり、日高アイヌの名稱をもつ。

衣服の紋様は、道南地方浦河と共通する部分もあるが、男性的で大胆である。子供の擾乱も人に肌を見せず、ワンピースの中に子供を抱く事のできるモウルとさう下着や、豪華なアツシ、チカラカラッペ、小袖を思わせるカハラミプがある。これらは、幕府の役人との目見得の時、彼等と対等に相対する衣服である事が、文献に依って実証された。

デザイン・製作技術共に優れたものが多い中で、カハラミプの衣服は一般に、袖全体に白布を置き、身頃の部分と同じ紋様が置かれる事はまれであるが、ニ風谷の元禄袖型のカハラミプは、袖にも全体に白布が置かれ、切り伏せされており、隅々迄行き届いた衣服は、あまり例を見ない貴重な資料を見る事ができた。